

市産材を利用した木造住宅などへの助成

市では、市産材で戸建住宅や公共的施設などを整備する際に、市産材の利用量に応じた助成を行うことで、市産材の積極的な利用を進めています。



市産材を使った戸建住宅(左)と保育施設(右)

大分市林業作業士確保育成支援事業

林業分野への就業を目指している人や林業を新たに始めようとする人を対象にした「おおいた林業アカデミー」の研修生に、交通費相当の助成を行っています。

おおいた林業アカデミー 31年度研修生 (第二次募集)

※第一次募集は終了しています

林業に従事した経験が1年未満で、研修終了後に県内の森林組合や林業会社などの林業分野に就業することなどが条件です。

- 募集期限：3月1日(金)
 - 研修期間：4月中旬～2020年3月
- 申込方法など詳しくは、(公財)森林ネットおおいた(☎546-3009)へ。

大分市公共建築物等における地域材の利用の促進に関する基本方針(24年3月策定)

県内の森林で採れた原木を製材した木材や県内の加工業者などから供給された国産の木材を「地域材」として、利用促進を図るための方針を定めています。

地域材を利用することで、森林の適正な整備・保全や地域活性化、雇用の創出などにつながるほか、木との触れ合いや木の良さを実感する機会を増やすことにもなります。

市産材などの利用促進と林業の人材育成に向けた取り組み

林業は“世代をつなぐ” 壮大で誇らしい仕事

先人たちには頭が下がる思いです」と松田さん。現場で新たな苗木を植えるときは「50年後、この木が育ち、皆さんの暮らしに役立ってほしい」との願いを込めているそうです。今、林業が抱える課題の一つである後継者不足。これからの森づくりを担っていく老木の松田さんを、松田さんは「若い力が林業に携わってくれることがうれしい」と顔をほころばせて話していました。

林業は木を伐採するのも、山を測量するのも、新しい技術が導入されているとはいえ、人の力が必要です。また、苗木を植えて、木材として切り出すまでに長い時間がかかるため、植えた木の収穫には立ち会えないかもしれません。それでも、未来のために、今ある森林を守り、育てるのが林業の仕事。そこには先人たちが抱いたであろう誇りと熱意が一緒に引き継がれ、今に息づいています。



伐採の様子。木は切り倒すときも、植えるときも、一本一本行われる。



林業に携わっている老木さん(右)と松田さん(左)

大分市と由布市管内の森林を管理する「おおいた森林組合」の老木裕成さんは、林業の現場に必要な基礎知識や機械操作などの技術を習得できる「おおいた林業アカデミー」の29年度研修生。林業アカデミーは、県内の森林組合や林業会社などの林業分野への就業を目指す人を対象にした、未来の担い手を育てる研修の場です。この研修生に対して、市では「大分市林業作業士確保育成支援事業」として支援を行っています。老木さんも、支援を受けて昨年春にアカデミーを卒業し、林業の仕事に携わっている一人です。もともと医療関係の仕事をしてきた老木さんは、「自然に関わる仕事がしたい」という強い思いから研修に応募。スギやヒノキの見分け方や専門用語の修得といった林業の基礎知識から、チェーンソーや重機の操作、メンテナンス方法など実践的なことまで、一年間みっちりと学んだそうです。「今

は切り倒す木の選定と伐採、測量や草刈りなどを行っています。毎日忙しいですが、とても充実しています」と笑顔で話してくれました。「木が伐採できる大きさに成長するのにかかる期間は50年ほど。それまで先人が育て整備してきた木を、私たちが切らせていただく。そして、今植えた苗木は、次の世代のために整備していきます。林業は、まさに、世代をつなぐものだと感じています。壮大で、とても誇らしい仕事です」と老木さん。未来の森林を造っていくことに大きなやりがいを感じているそうです。老木さんの上司である松田浩二さんは、林業に25年携わってきました。「昔は何でも手作業で、切った木材を馬で運ぶこともあったようです。周りの環境が変わっても、山の地形は昔から変わらない。勾配が急な場所もある中で、今ある森林を造った

つなぐ | 緑豊かな森林を次の世代へ

人から人へつなぐ、守られてきた森林。この財産を未来へつなぐため、市では担い手確保や市産材の利用促進などの取り組みを行っています。